成熟社会の五輪・万博

6 月 8 日の講演で、来年の東京五輪・パラリンピックとからめて、なぜ今「二度目の大阪万博なのか」と問題を投げかけた。朝日新聞 12 日朝刊「多事奏論」、原真人・編集委員による令和の五輪・万博、成熟社会での「宴」の意義に注目した。同感するところが多いが異論もある。異論はあとにして、まずは原さんの「論」を紹介しよう。

昭和の〈五輪・万博セット〉で成長を謳歌したあの夢よもう一度、とばかりに 2020 年には東京五輪・パラリンピックが、25 年には大阪・関西万博が開かれる。五輪チケットの販売も始まり、国民の気分が高揚し始めたこのタイミングで水を差すのもどうかと思うが、改めてこのビッグイベントの意味を考えたい。

というのも、こうした巨大イベントは数兆円、数千億円規模の開催費がかかる。負担が重すぎて、最近は誘致に二の足を踏む国がほとんどだ。おまけに道路は渋滞、ホテルは満室、公共交通機関の混雑もかなりひどくなる。そんな負担と不便を強いられてまで開く意味を、国民はどこに見いだせばいいのかと考えたからだ。ヒントを求めて、25 年万博が開かれる予定の大阪市臨海部、夢洲を訪ねた。

夢洲は新大阪駅から車で 40 分ほどの場所にある、もともと大阪五輪をあてに造られた人工島だ。390㌶の島の半分ほどには船の貨物を積み下ろしするコンテナターミナル、太陽光パネルの大型発電施設がある。残り半分は見渡す限りペンペン草が生えた広大な空き地であり、いまだ埋め立てが未完の区域もある。ここに万博会場と、カジノも当て込んだ統合型リゾート施設を建設する予定だ。

島につながる入り口は橋 1 本とトンネル 1 本。平日の昼下がり、トンネル道はコンテナを積んだトラックでかなり渋滞していた。鉄道ルートも整備するらしいのだが、万博開催までに埋め立てを終え、交通網を整備し、巨大施設と万博会場のパビリオン群まで完成させるとなると、工事はかなりのハイペースが必要になるだろう。

ふと、心配になった。細い物流線に大量の建設車両まで入ってきたら、コンテナターミナルは機能するのだろうか。そもそも工事自体をうまく進められるものか。地元企業の幹部が「その点を経済界でもかなり心配しています」と教えてくれた。東京五輪のメイン会場となる新国立競技場の建設現場では、厳しい工事日程で作業員に無理を強い、安全上の問題が生じていると報じられている。夢洲の建設現場でも同じ問題が起きる恐れがある。そんな無理を通してでも、やるべき宴、求めるべき成長なのか。そんなことを考えてしまう。

大阪府や地元経済界の誘致運動での合言葉は「東京が五輪ならこちらは万博で」。どちらの誘致運動も昭和の高度成長の再来を期待するようなムードが後押しした。昭和五輪は 1964 年、昭和万博は 70 年の開催である。当時の日本は人口増加社会で、成長力もある、いわば新興国のようなものだった。社会インフラもまだ脆弱。いずれ造る必要が

ある道路や鉄道、公共施設を五輪や万博をきっかけに一気に整備することには、道理も合理性もあった。地方から都市に出稼ぎに来る労働者も多く、雇用の受け皿をつくる意義もあった。つまり巨大イベントは、あらゆる国民的な要請にかなった社会的投資だったのだ。

いまは超高齢化と人口減少の成熟社会である。半世紀前とは環境が様変わりした。人出不足が深刻で、老朽化した社会インフラは、人口減に合わせてむしろダウンサイジングが求められている。こうなると、令和の〈五輪・万博セット〉は、有益でないどころか、むしろ有害でさえある。

巨大イベントで景気を浮揚し、経済成長を実現する―という神話は、現代でも世論に受け入れられやすい。すでに開催が決まったのだからいまさら異論を言っても始まらない、という意見もある。ならば目を凝らして見ておいてほしい。成熟社会における五輪と万博の行く末を。それが何をもたらし、何をもたらさなかったのかを。そして、よく思案してほしい。宴の跡のあの島を、これから何の象徴として、どう後世に伝えていくかを。

写真は対岸の咲洲から撮った夢洲全景、5月11日に「初上陸」の夢洲のいま。

原さんの「令和の五輪・万博」に対する批判には同感するが、「昭和の五輪・万博」については異論がある。いずれ造る必要がある道路や鉄道、公共施設などを五輪や万博をきっかけに一気に整備することには、道理も合理性もあったというが、果たしてそう言い切れるのだろうか。そうした開発のあり方こそが問われているのではないか。かつて名古屋五輪誘致を考える集会で、宮本憲一先生が「お祭り型公共投資」という言葉を使って、国家イベントに便乗した社会資本整備を批判されたことを覚えている。

「お祭り型公共投資」は過大需要予測により、公共事業予算が大盤ぶるまいされ、地元自治体の財政負担を累積的に膨張させることが多い。大阪のカジノに依存した夢洲での万博は、まさに「お祭り型公共投資」の再現ではないか。

原さんもせっかく夢洲に「上陸」したのだから、夢洲のリスク、カジノと隣り合わせの万博開催にも触れてほしかった。大阪のメディア、なかでも朝日新聞がこんな「多事奏論」を奏でてほしいものだ。

（2019年6月21日）